

「私の授業を語る；スポーツとエロス」の テーマをいただいて

阿部一佳
体育科学系教授

はじめに

ひょんなことから本欄に投稿する破目になりました。本誌編集委員の一人も加わっている小さな研究会の準備会に、私も参加していたのです。立ち上げたかったのは‘オリンピック研究会’。時宜を得て、インターネット上で‘オリンピック研究所’を立ち上げようというのです。たまたま私も授業でオリンピックを教材にしていた関係で、何か協力できることがあればと考えておりました。その際に、変わるオリンピックの基盤ということで、アトランタ大会の頃から始まったオリンピック選手のヌード写真集等の世界的流行が話題になりました。オリンピック関係競技の強化体制が、様々な組織によって集中的に整備されて行く中で、非体制的な強化を余儀なくされる弱小競技の選手達が、強化費や遠征費を捻出するために男女を問わず、商業誌にヌードを売る傾向が次第に広がっている

のです。しかも、その発行部数は、数万のオーダーを越えて、十数万部にまで達している。けれども、今やテレビでオリンピック観戦をする者は、値を越えるわけですから、ヌード誌やヌードカレンダー購買者のそうした数などは比較にならない程に小さなものでしかないのです。それでも、こうした新しい動きは、初めて商業的に運営されたオリンピックとされる1984年のロサンゼルス大会の意味を敷衍しているのかもしれませんが。こうした現象を授業の役割とテーマの中でどう切ってみるのか、スポーツに携わる私達の琴線をくすぐる問題ではあったのです。

すると、どうしても‘1984年’という年の面白さが先に気になります。‘1984年’となれば、前述のユベロスのオリンピックという問題を越えて、ジョージ・オーウェル（1903-50）の「1984年」を考えてしまうからです。当局に捕われた

ウィンストンが集団主義の思考に屈服する構図を、或はヌードになる選手達に重ねて見るができるかもしれないからです。「果たして、オリンピック選手の一人一人がヌードになることを望んだか」という素朴な疑問を抜けて、「国家と社会のどちらが大きいか」「社会と個人はどちらが大きいか」という問いで収まらなくなっている「文化と私の関係」を見る格好な教材でもあったわけです。それは、今を見る丁度よい題材なのかもしれません。ともあれそんなわけで、彼の編集委員より「私の授業を語る；スポーツとエロス」と言うテーマを頂戴することになったのです。

授業で課題化されたもの

何とも厄介なことです。なかなかヌードの問題をエロスには結んでいけない。実際に授業も、題材にも関わらず、エロスとは遠い所で行われました。プラトンが『饗宴』でソクラテスに語らせる‘エロス’の話を敢えて次のようにまとめてみましょう。「エロスには己に欠けているものがある。そのために彼はその欠けているもの、つまりいっそう高い存在性に憧れを抱いていた。彼はそのような高い存在性に動機づけられていた」と。このように受け取ってみると、頂戴

したテーマがまるで駄洒落でもあるかのように、選手達は正に欠けているトレーニング条件の改善を図るために動機づけられてヌードになったのです。それは‘エロス’の問題なのかもしれません。しかし、「お金稼ぎのために、オリンピック選手がヌードになった」ということになると、これはスキャンダル以外の何ものでもありません。スキャンダルという言葉が難しい言葉であるように、オリンピック選手のヌードもまた難しい事件のように思われました。

受講した学生の反応も「美-卑小」「恥ずかしい-恥ずかしくない」「自己責任-集団の犠牲」「商業主義の悪用-商業主義の犠牲」等の二項対立的な価値観の中でこの問題を捉えようとしていました。私とは言えば、この際に姑息にも東大の教養の教材の一端を多少なりとも紹介しておこうという腹積もりもあって、旧版の『知の技法』（1994年）から表象文化論的な松浦寿輝氏の‘マドンナの仕掛け’論も使わせていただきました。実は、大方の学生は、オリンピック選手のヌードを「美」の対象として捉えることで肯定的な態度を示していたのです。それは、美概念を導入することで、自己決定の動機を肯定しようとするものでした。一方、松浦氏の「SEX by MADONNA」解釈は、

マドンナ現象を‘神話’的に解釈し、‘性’が‘隠されたもの’であるとする
ことによって持つ意味構造を逆手にと
って、ことごとく‘顕在させる仕掛け’
によって‘隠されたもの’の意味を無効に
するという、マドンナの挑発を明らかに
するもので、やがてそれは視線や肌触り
で終わるものでした。このいずれから
も、オリンピック選手のヌードに或る衝
撃を覚えた‘私’の心理は説明できな
かったのです。それは前述した「オリ
ンピック選手のスキヤンダル」と言う限定
された問題が‘美による肯定’‘顕在化さ
れたもの’等の切り口では何も開かれて
こないように思われたからです。

そこで、‘スキヤンダル’から直接こ
の問題を解釈してみました。1976年の
『現代思想 Vol.4-6』が‘スキヤンダル’
を特集しています。その中で佐竹明氏の
論文「スキヤンダルの思想」が示唆を与
えてくれました。‘スキヤンダル’は、
＜跳ね上がる、跳ね返る＞＜ばたと閉
まる、わな＞等の意味を持つギリシャ語
の‘スカンダロン skandalon’を語源に
しています。佐竹氏は論文の中で、この
‘スカンダロン’に注目し、旧約聖書の
ギリシャ語訳である『七十人訳』（紀元前
3-1世紀）が書かれた時に、二つのヘブ
ル語、＜毘＞の意味の‘モーケーシュ

moqush’ と＜顯く＞の意味の‘ミク
ショール mikhsol’の訳として‘スカン
ダロン’が与えられたとして、ユダヤ教
に対するキリストの関係を次のように解
釈しています。

‘モーケーシュ’とは 神がモーセを
介してイスラエルに与えたとされる律法
を無視すること。特にヤハウェ以外のも
のを神としてはならないとする誡めを破
ることで、このことを＜毘に落ちる＞と
言う。これはとても厳しいもの見方
で、ユダヤ教の特異性を強く示すもの
だ。さて、こうした厳しい律法を持つユ
ダヤ人が、特にバビロン捕囚後エルサレ
ムに帰ってからは、いっそう律法重視の
姿勢を強めていく。この人達を‘パリサ
イ派’と呼ぶが、ここへイエスが出現す
る。パリサイ派にとっては‘イエスの存
在’そのものが‘モーケーシュ’つまり
‘スカンダロン’に他ならない。という
のは、パリサイ派のいう律法遵守には、
多くの素養を積む必要があり、特定の
人だけに可能だった。例えば、安息日に39
種類もの労働をやってはならないのだ
が、その中には多くの日常生活の活動が
含まれていて、雇い人を抱えていない限
り実践不可能だった（安息日と‘レ
ジャー問題’は授業の中心テーマ）。そ
れでも、このことを守れない者をパリサ

イ人は‘地の民’と呼び軽蔑した。イエスの生き方は、地の民と一緒に食事をするなど、こうした根本に触れる、社会秩序を脅かすものだった。イエスはパリサイ派の人々の律法熱心を、心の伴わない形式に過ぎぬと批判した。そして、イエスは十字架に架けられるが、パリサイ派はこれを「イエスが願いた（ミクシヨール）」と言った。しかし、この時、パリサイ派の人々は、実はイエスに「願いた（ミクシヨール）」のである、と。

‘スカンダロン’とは、このような二重の畏の意味だったのです。

おわりに

オリンピック選手のヌードを、以上の

ような意味でスカンダロン、いや‘スカンダロン’として解釈してみるのです。オリンピック組織関係者をはじめ多くの人々は、オリンピック選手が「願いた」と思ったことでしょう。しかし、今や‘オリンピックに参加することの現れ方’は、オリンピック選手をヌードにする程のものになっているわけです。これはオリンピック自体が「願いた」のかもしれませんが。美・醜の対立項で解釈を進めた学生も、この問題に「願っていた」のかもしれませんが。

因に、古代オリンピックが裸で行われたという事実は、こうした文脈とは全く違う所にあるものです。

(あべかずよし スポーツコーチ学)

